

地域の明日を夢見て・・・市民劇第2弾は

「琵琶湖治水の物語」

あふれる水。水害に泣く農民。
かつて、琵琶湖の治水に命をかけた庄屋がいた。主催／びわこ高島えんげきのまちプロジェクト
実行委員会・高島市・高島市教育委員会
主管／市民劇2010上演実行委員会
助成／財団法人地域創造

日時

11月27日（土）18時開演
11月28日（日）14時開演

場所

藤樹の里文化芸術会館

料金

一般 1,000円
高校生以下 500円

その他

・全席自由・各回450席限定
・未就学児入場不可
・託児サービスあり（事前申込制。11月21日締切。詳しくはお問い合わせください。）

【販売所】

・高島市民会館・藤樹の里文化芸術会館
・ガリバーホール・やまびこ館
・マキノ土に学ぶ里研修センター
・中江藤樹記念館
・今津東コミュニティセンター
・新旭公民館・安曇川公民館★チケットは9月26日販売開始！
土・日別チケット

「文化」と「人」を舞台でつなぐ

市では「文化で高島市をつなぐ」取り組みを行っています。平成18年3月に市民文化の祭典として開催した「高島市さとやま劇場」を皮切りに、平成18年から「びわこ全国青少年演劇祭」を毎年開催。平成20年には藤樹先生生誕400年祭の一環として市民劇「藤の樹と風と—中江藤樹物語—」を上演。さらに同年、2回目となる「高島市さとやま劇場」を開催しました。これらの取り組みは、高島市が誇る「文化」と「人」を舞台でつなぐという、新しい文化創造への挑戦です。

市民劇第2弾は

藤本太郎兵衛の功績を舞台化

今回、中江藤樹物語に続く市民劇第2弾として舞台化するの、深溝村（新旭町深溝）の「藤本太郎兵衛」です。親子孫の3代にわたって、琵琶湖の水害を克服しようと、瀬田川の川ざらえ実現に挑んだ江戸時代の庄屋です。

当時、雨が降り続けると琵琶湖の水はふくれあがり、背丈ほどにもなつて村々へ押し寄せました。これを「水込み」と言います。水込みになると、田畑は水につかり、大きな被害をもたらしました。この水害をなくすために

は、琵琶湖唯一の水の落ち口、瀬田川の土砂を取り除き、水の流れをよくするしかない。「瀬田川の川ざらえ」。これを実現するために、琵琶湖周辺200の村々の同意をすべて得た上、自前

◀稽古の様子



の費用で工事を行うということが条件でした。藤本太郎兵衛は川ざらえを実現するため、川ざらえ嘆願の代表者として、幕府との交渉にあたります。農民の暮らしを救いたい一心で、太郎兵衛は交渉を続けますが、幕府からはいい返事が返ってきません。やがて高齢になった太郎兵衛は、息子に代表を引き継ぎます。それからも粘り強い交渉が続きますが、幕府の動きは遅く、許可が出る気配はありません。やっと本格的な川ざらえが実現するのは孫の代、50年もの月日が流れた後でした。

朗読と勇壮な太鼓の共演

これまでになく壮大な舞台

「郷土を守りたい」その一心で、数々の困難を乗り越え、時間と闘い、川ざらえを実現した藤本太郎兵衛。その親子孫3代にわたる苦闘を、30人以上の迫力満点の朗読と、勇壮な太鼓の共演により、ダイナミックに描きます。市民劇「琵琶湖治水の物語」。高島市の歴史に確かな一ページを刻む舞台です。皆さんのご来場を、お待ちしております。

問・申 藤樹の里文化芸術会館

☎(033)2461



脚本・演出メッセージ

かつて琵琶湖は人に何をしたか、人は琵琶湖に何をしたかを描く

実行委員長メッセージ

芝居・群読・太鼓のコラボは観る人を圧倒。市民手作りの大作に

琵琶

琵琶湖の水害から農民と田畑を救え！

ひとりの男が立ち上がった。江戸後期にあつて、親・子・孫の3代、50年にわたり、全財産と命をかけて苦闘し、ついには江戸幕府をも動かした、琵琶湖の増水害から農民の生命、そして田畑を守り、飢えから救うべく、瀬田川の川ざらえに全身全霊を打ち込んで挑んだ、藤本太郎兵衛。

「琵琶湖治水の物語」高島市誕生5周年記念市民劇は市民による手作りの大作です。

迫真の芝居と群読（クロス）、勇壮な太鼓が響き渡るコラボレーションは観る人を圧倒し、舞台に引き込むことでしょう。

江戸時代の高島には、こんな壮大な事業に取り組み、命を削って成し遂げた先人たちがいたことを、舞台から感じ取っていただければ幸いです。

「舞台」「出演者」そして「観客」。この3つがそろってはじめて演劇は成り立ちます。多くの市民の皆様がぜひご覧いただき、ますますようご案内申し上げます。



足立 清勝 さん

市民劇2010上演実行委員会
実行委員長

日本一といわれる琵琶湖辺に立つて、あらためてその大きさと向き合った。そして、瞑目し、遠い昔を想像した。

降り続く雨が、見える。増水する琵琶湖が見える。そして、周辺の田んぼに浸水していく様子が見える。生育した稲があふれた湖水にもてあそばれ、やがては腐蝕していく。農民が見える。琵琶湖を見つめるその目には悲しみと自然に対する畏怖と繰り返される悲劇への怒りがあふれている……。

目をあけると目の前の琵琶湖は波を立て、降り注ぐ陽の光を跳ね返し、キラキラと輝いている。かつて湖辺200か村の田に襲いかかり、幾多の農民を絶望のどん底に落としこんだ、などという歴史はすっかり忘れ果てたかのようには輝いている。

今回は、かつて琵琶湖は人間に何をしたか。そして、その琵琶湖に向かって人間は何をしたか……。それを描き、上演する。そして「郷土に生きる」「郷土をつくる」という永遠のテーマをみんなで考える。もちろん、客席に座っていたいただくまちの人たちを熱く巻き込みながら……。



大峰 順二 さん

「琵琶湖治水の物語」
脚本・演出